

リンチは何をそんなにおそれているのか

December 22, 2012

伊勢田哲治

エスノメソドロジーそのものに関する議論は今回は荷が重いので、主に科学社会学をめぐるリンチの分析、批判と、それに対するリンチの対案というあたり（つまり第二章、第三章プラス第七章の一部）を中心に検討したい。

0 翻訳について

原文もなかなかの難物だが、翻訳も決して読みやすいとはいえない。原文で一文になっているところを細かくわけて訳すなどの工夫はあるのだが、工夫したためにかえってつながりがわかりにくくなっているところもある。今回の資料をまとめていて疑問に思ったところはあとに付録としてまとめてあるので何かの参考になれば幸いである。

以下でリンチの引用をする際に翻訳を使用せず独自訳をつけているところがあるが、伊勢田はそう読んだということなのであしからずご了承ください。

1 知識社会学、科学社会学の既存の立場に対するリンチの評価

それぞれの立場についてリンチがどういう点を取りあげどういう評価を下しているか簡単に確認しておく。

(1) マンハイムについて

- ・自然科学的知識、社会科学的知識、日常的知識という3つのシステムを区別し、前のものほど価値自由な度合が高いと論じている。p.63 自然科学を知識社会学から除外したのは知識社会学自身の妥当性要求を自然科学の基準で評価せずにするため p.65

- ・マンハイムの問い：社会過程における実存的要因は単に周辺的に重要なのか、それとも具体的な主張の「パースペクティブ」に入り込んでいるのか p.64

- ・自然科学を対象から完全にはずしていたわけではないことをにおわせる箇所もある p.64

- ・2つのステップを使った論証という議論の形をつくった p.67

- ・ダーウィンにもこの議論はあてはまる p.67

・マンハイムは $2 \times 2 = 4$ といった命題が歴史化できるとは想像できなかったが、ウィトゲンシュタインを援用すれば、この命題を別の仕方理解する文化や別の数の体系に当てはめる文化があってもおかしくはない。 pp.68-69

マンハイムに関する記述は全体として比較的好意的。数学や自然科学を対象から外していた、という、後からみれば当然限界はあるものの、その限界はウィトゲンシュタインやクーンの視点を導入することで補える、といった論調。

(2) マートンとその仲間たちについて

・プロテスタンティズムと科学の関係についてのマートンの論文。一見外在主義的な説明に見えるが、「転轍手」型の議論をしている p.73

・ブルアとバーンズは「原因」の概念の拡張により、「転轍手」もまた原因の一種だと論じる。 pp.74-75

・しかし、「そうした「外在的」な説明では、説明されている科学知識の地位を引き下げるのに何の役にも立たない p.75

・科学のサブカルチャーに言及する説明も、マートンらのプログラム全体と相容れないわけではない p.76

・科学の4つの規範 pp.79-80

・4つの規範に対するバーンズらの批判。口で言っている規範と肯定的サンクションを受ける規範は区別すべき pp.80-81

・自己例示的なものとしてのマートンらの立場。科学社会学そのものが科学としての要件を備えてきた pp.81-82

・しかしそのころにはすでにマートンのプロジェクトは崩壊を始めていたとターナーは言う p.83

・マートンの立場は「特殊に曖昧」 *specifically vague* なので批判でやっつけるのは難しい。実際、規範についての批判には答えることができる。 p.83

・科学の規範は科学とその他の社会との間の可動な境界を作り出し維持するためのレトリックを示したテーゼとなる」つまり、社会全体ではなく、特定の集団にとっての機能としてとらえることができる。 p.84

・Gieryn はマートンの弟子だがこの方向でマートンとストロングプログラムを結びつけた p.385 注 69

・ストロングプログラムはマートンのプログラムと矛盾はしないかもしれないがマートンらが自分たちでその方向に発展させたわけではないので、その意味ではストロングプログラムのア

プローチにも意味があった。 p.85

マートン派プログラムはあまり肯定的には描かれていないものの、この箇所の重点はマートン派プログラムへのストロングプログラムの批判が空振り気味であるという方にあるように見える。

(3) 科学知識社会学におけるストロングプログラムについて

- ・マンハイムの2ステップの論証の型は踏襲。第一ステップには哲学的な決定不全を使い、第二ステップには人類学などの成果を使って精緻化 pp.86-87

- ・ブルアやバーンズは哲学者から相対主義だと批判されがちであるが、「自分たちが社会学的実在論や科学主義に強く傾倒していることを表明している」 p.90

- ・ブルアの四つの基本原理 pp.91-92

- ・因果性は広く受け入れられているわけではない p.92

- ・因果的な説明をする研究プログラムは、ある集団の集団的な知識を「割り引いて考えたり軽視しなければならなくなる」ので研究対象から拒絶されがち p.94

- ・対称性と不偏性は構築主義などの他の立場でも支持されている p.92

- ・対称性と不偏性は「目的論的説明」の回避には効果的 p.95

- ・しかし「科学者が専門分野で何らかの主張を展開したり、その誤りを暴いたりするのに用いる内生的な語彙や理由や正当化に頼らずに、社会学者は論争的なエピソードをいかにして記述できるのか」 p.95

- ・デュエムクワインテーゼなどの哲学的テーゼを使って厳密な検証によらずに何かの決定がなされたと示されたとき、それが不可避なことであるにもかかわらず不適切なことが行われていたと思ってしまう、という混乱が生じがち p.96 ←この判断を「混乱」とまとめているところに注意

- ・対称性を使って競合する理論を公平に扱うことで結局「制度化された科学者の主張の相対的地位を格下げするというレトリックの効果をもたらす」 p.97, p.389, 注 19

- ・証明と反証はシステムの中で行われるので、超越論的基準にたどりつかないことは恣意性を意味しない、とウィトゲンシュタインは言っている p.97

- ・マンハイムとマートンにとっては再帰性は自分たちの合理性をおびやかすものではなかった。

p.98

- ・ブルアはラウダン（訳文ではローダン）に対する答えとして知識社会学者は科学を模倣することで科学のやり方を学ぶと言う。 p.99

・この答えは多くの疑問を生む。どうやって模倣するのか。数学を研究していてどうやって社会学のやり方が分かるのか。科学社会学者はむしろ研究対象から距離をおこうとしているのではないか。など pp.99-100

ストロングプログラムがマンハイムと連続的なのは当然としても、普通対立的に捉えられるマートンとも連続的なものとして歴史が記述されている点は興味深い。

因果性や対称性、公平性が必ずしも相対主義を目指しているわけではないのに相対主義的に読まれてしまう理由が指摘されているあたりが面白い。ただ、わたしはブルアの「実在論的」だという発言の方がリップサービスで、基本は相対主義的科学観（すくなくとも、現在の科学に与えられている権威は大きすぎるという考え方）をとっているのではないかと考えている。このあたりはどちらが正しいというものでもないと思うが。

(4) 経験的相対主義（コリンズ）

・重力波論争。ウィーバー（訳文ではウェーバー）と批判者たちは実験の解釈や追試が適切に行われたかなどについて意見が食い違っていたが、最終的にウィーバーが重力放射がこれまでの物理現象と連続的であることを認め、静電気を使ったカリブレーション（訳文では調整だがもし日本語にするなら較正とかでない）と正確な意味が伝わらない）を受け入れたところで批判者に屈した。 pp.104-106

・「コリンズは重力波論争の「終結」が単一の「決定テスト」によっていたわけではないことを説得力を持って示している」 p.107

・しかし、「どんな単一の追試や議論も決定的には誤謬を論証していないとしても、ウェーバーの主張は誤っていたと論じることができるだろう」 p.108 ←はっきり書いていないが、いろいろな証拠の相乗効果としてウェーバーの間違いを示すというようなことを想定している？

コリンズについては、リンチはその功績を一応みとめているようではある。「説得力を持って」といった肯定的評価語は他の紹介ではあまり使われていない。

他の流派については意図せずに相対主義と読まれてしまう点を指摘しているわけだが、コリンズは最初から相対主義を標榜しているためもあり、そういう批判はしていない。しかし、相対主義が成功しているかというところをそう思っているわけでもなさそう。

(5) 構築主義的なラボラトリースタディーズ（ラトゥール、ウールガー、クノール＝セティナほか）

- ・ラボスタの創始者としてはラトゥールらとともにリンチ自身の名前もあがる。注 44 でラトゥールらがクレジットを独り占めしている様子についてねちねちと書いている。
- ・その中でも主な研究がとっていたのが構築主義のアプローチ
- ・「構築主義の社会学者は知識社会学への自らのアプローチを哲学上の相対主義や観念論と区別しようと努めてきた。それにも関わらず、彼らは依然として実在論と構築主義の論争に巻き込まれたままである。」 p.91
- ・マンハイムの最初のステップはここまでは主に哲学的議論でまかなわれてきたが、ここにはじめて「実験室のプロジェクトやコミュニケーション上のやりとりの歴史にきわめて徹底的に焦点を合わせたものになった」 p.110
- ・ラトゥールとウールガーは、研究者たちが「物自体を研究することはなかった」、むしろ「文字による銘刻を検討していた」と主張 p.110
- ・ラトゥールら自身が太字で強調していた主張：「事実とは様相-Mも著者性の痕跡もまったくない言明のことにすぎない」。様相とは限定句やマーカー。「～とおもわれる」とか「データは～を指し示す」など p.111
- ・ラトゥールらの観察がソフトだという批判に対しては、研究者を大人数で一斉に観察したり切り刻んだりできないから、と答えている。 p.113
- ・ラトゥールらは実在を度外視して言明やその関係に注目するあたりで実は論理実証主義の「左利きの変種」（つまりいろいろ反転してはいるが基本的な構造は似ている）1とでもいうべきものになっている。
- ・論理実証主義から受け継いでしまったもう一つのものが、世間的な先入観をとりのぞいた分析原語の構築、というやり方。 p.114
- ・ラトゥールとウールガーは不偏的なメタ言語をなんとか作ろうと努力していたが、これは結局論理実証主義の中立的な観察言語の探究と同じような作業になってしまっている。 pp.114-117
- ・「構築主義に対する評価が難しい理由は、その用語法が、その議論が支持する以上の明確な形而上学的立場をしばしば示唆してしまうところにある」 p.120（訳文若干修正）
- ・構築主義はマンハイムの問い(p.64)に明確な答えを出していない。事実の安定性が構築の原因ではなく結果だ、と主張するにしても、「構築されていない実在」という可能性を認めないなら、ほとんど意味のない主張になってしまう。 pp.120-121 ←ラディカルすぎて自爆みたいな話？
- ・ラボラトリースタディーズをやっていた人たちはいろいろな理由から文献研究へ後退していった。 pp.122-124
- ・再帰性そのものが研究の対象になるようになってきた。 pp 125-126 ←構築主義の危機という節に含められているがなぜ？

構築主義とラボラトリースタディーズという、重なるけれどもあくまで別のカテゴリーを一緒に論じているので大変分かりにくい。

マンハイムの第一ステップを経験的にやれるようになった、というあたりが功績？

批判点の方は、ラディカルなことを言っているように誤解されやすいのに、その誤解をまた利用しているあたりが問題、という感じだろうか。あと、言語偏重の考え方も論理実証主義見たいといって批判されている。しかし、本人たちはいやがるだろうが、論理実証主義みたくてというのがそんなに悪いことかどうか（リンチ自身はどう思っていたのか）よく分からない

(6) ポスト構築主義

・ラトゥールの「作動中の科学」やラトゥールとカロンの「アクターネットワーク」など
・彼らは伝統的な社会学と距離をおいていると主張するが、彼らの説明を「権力、社会的影響、権謀術数といったより伝統的な社会一歴史的概念の観点から理解するのは簡単」 p.129 「ラトゥールの物語は、研究プログラム上で自ら否定した社会学的な誤読と流用を結果として招く」 p.130

第三章の冒頭でリンチは、新しい科学社会学は「哲学や社会学の探究における日常言語の役割に関連する、よくある落とし穴にはまっている」ことを指摘するのが本章の目的だと指摘することを挙げている。 p.89

この落とし穴とは、結局、「客観的探究へのコミットメント」を受け入れてしまっている点、そのため「研究領域内にある理論的コミットメントや言語使用から距離をとるべき」だと考えてしまう点だと考えられる p.135

おそらく同じことを述べているとおもわれるのが p.345。

認識論のトピックを敵意をもって継承しようとするのはこれまでもあったが「そのように継承する取り組みは、科学の神話学的な捉え方にうたててなんらかの研究プログラムに対する分析的基盤を確保しようとしたために覆されてきた」 p.345 (訳文は若干手を入れています)。覆される *subverted* というかなり強い否定的な評価語が入っている。

ということは、そうやって距離をとろうとしない、自分の足場を確保しようとするやりかたこそ「落とし穴」をさけ転覆をさける社会学的研究のやりかたということになるとおもわれる。

2 リンチ自身の対案

第三章の「ワークのエスノメソドロジー研究」の項(p133~)ではあまり詳しく紹介されていない。結局リンチの対案が全貌を表すのは第七章になってから pp.334-353

・探究の対象は認識トピック **epistopics**: 「科学的推論や実践的推論の議論にしばしば出てくる言説上のテーマ、つまり観察、記述、反復、測定、合理性、表象、説明である」 p.344←これは例？網羅的なリスト？

・認識トピックはもともと日常的な探究に関連するものだったが「大学に行って、訓化されて帰ってきた」日常的なテーマ (p.344)

認識トピックの探究の7段階

- 1 認識トピックを一つとりあげる。
- 2 原始的事例を探す
- 3 認識トピックをたどり、詳細に実際に事例を探究する
- 4 固有の妥当性要請に応じてそれぞれの事例を探究する
- 5 エスノメソドロジ的無関心を科学の存在という事実に適用する
- 6 通常科学の方法論を使用する
- 7 「知見」を古典的な論文に関連づける

詳しいことははぶくがポイントだけ見ると

・前半の項目のポイントは、科学以外のものについての認識トピックの例からはじめて科学の事例へとたどってくるという方法論

・ただし、エスノメソドロジ的無関心、すなわち「科学者や数学者の活動が認識論的に「特別」であるかどうかについての判断を停止したい」(p.349)という動機で研究するので、科学は結局特別な研究対象ではなくなる。研究する側もされる側も特に特権的な地位を持たない（持つかどうかについて判断を停止する）という形で地位を確保したわけである。

・通常科学というのはここでは統計みみたいな fancy な手法を何もつかわず、誰にでもできるような手法で研究するということらしい。

・7で言っているのは、どうやら同じ認識トピックでも中身は多様なので、その多様性をリストアップするだけでも既存の一般理論に問題を提供することになる、ということらしい。←たまたま同じ言葉で呼ばれてるからって同じ見出しのもとに集めること自体、方法論として正統性を持つのか？

この方法論は結論ではさらに「プログラム上の記憶喪失」や「原始的自然科学」といった言葉で言い換えられている p.358

一言でいえば、科学社会学が落ちている（とリンチが判断した）落とし穴を避けるために、高

度なものを高度なやりかたで距離をとって研究するのではなく、日常的なものを日常的なやり方で距離をとらずに研究する、という方向へ転換した、とまとめることができるのではないだろうか。

3 リンチの評価

ここではもちろん本書全体の評価ではなく、リンチが認識した科学社会学の問題とその解決について。

3-1 実験室の占める位置

結論においてリンチは「科学について語るのをやめよう！ 実験室へ行こう」という指令がエスノメソドロジーから発せられるという(p.365)。これは、「構築主義の危機」のところでの、ラボラトリースタディーズを継続的にやる人が少ないという悲しげな観察とも軌を一にするものである(pp121-124)。しんどい研究を敬遠するなよ、というのは同業者へのメッセージとして大変よいと思う。

しかし、認識トピックというプログラムの中で、なぜ実験室が主要な位置を占めるのかは必ずしも明らかではない。研究する側とされる側の距離をできるだけなくす、という問題意識があるのだとしても、なぜ実験室なのか。やはり何かそこで大事なことが起きている、というエスノメソドロジー的無関心と相容れない何かの判断を下しているのではないか。

3-2 科学的合理性との距離をめぐって

・「エスノメソドロジー的無関心」は科学が特別な認識論的地位を持つかどうかについて判断停止をすることだという。これによって、合理主義対相対主義、实在論対観念論といった論争から距離をおいたということのようである。

・しかし、上記のまとめでも繰り返してきたとおり、やっている本人が中立的であるつもりであっても、因果性（外部からの影響）を強調すること、良い理論と悪い理論の対称性・不偏性を強調すること（コリンズらの超心理学についての研究の例参照）、事実の「構築」といった用語を使うことなどは、結果として反实在論のニュアンスを持って読まれてしまう。

・このリンチの分析にはまったく同意するのだが、リンチ自身の立場表明（特にエスノメソドロジー的無関心について）を見て、わたしがリンチに対して同じことを感じてしまう。エスノメソドロジーもまた中立を装った反合理主義の立場ではないのか。

・中立を標榜することがぜんぜん中立にならない例としては、他にも、科学的实在論論争におけるアーサー・ファインの「自然な存在論的態度」がある。あれも实在論側にも反实在論側にもコミットせず、科学者のいうことに何もたさないことを標榜していたが、論争全体における

位置づけとしては、心から独立な実在を受け入れないわけだから反実在論側に分類されてしまう。

・なぜリンチは同じことがエスノメソドロジ的無関心には当てはまらなないと考えるのか。これは対称性・不偏性への「代替案」だという言い方もなされている(p.135)が、代替案となると考えているということは、両者の果たす役割も似通っていると認識しているものと思われる。だとすると、同じ構造的問題が発生することも予期されてしかるべきではないか。

・言い方を変えてみよう。科学がこれだけ成功を収めてきた以上、わたしには科学の合理性をデフォルトの立場として受け入れるのは自然に思える。それなのになぜリンチは禁欲的に「エスノメソドロジ的無関心」をつらぬき、科学の成功を見ないようにするのか。そこには判断停止にこだわることの積極的な理由があるのではないか。

3-3 なぜ「通常科学」なのか

・結局リンチが推奨しているのは、チョムスキーが言った意味での「通常科学」、つまりだれでもできるようなやり方で研究を行うということである。

・しかし、われわれはなぜこれまで社会科学が積み上げてきたさまざまな研究手法をすべてなげうたなくてはならないのか。リンチは一体何を恐れているのか。

・もちろん、答えの一部は「再帰性」にある。科学の合理性に疑いを投げかけるような研究をする上では、自分自身の合理性を安易に仮定できない。

・しかし、「精密な方法の合理性を安易に仮定できないことが分かったのでいい加減なやり方で行きます。」というのはわたしにとっては意味が分からない。「通常科学」は合理性において fancy な科学よりもますます劣るだけではないのか。

・われわれがバイアスに左右されやすい存在だというのは、それこそ fancy な心理学的実験などやらなくても日常生活でもしられていることである。そうしたバイアスを避けたいと思うなら、「通常科学」もちゃんとやらなくてはいけないだろう。しかし、そういう「ちゃんと」を推し進めて行ったら、結局車輪の再発明みたいにして統計的手法を再発明することになるだけではないのか。

・再帰性は、対象となる科学の合理性を否定するときには問題になるが、マンハイムのように科学の合理性を認めるなら、社会学的研究そのものへの脅威とはならない。

・この「合理性」はある程度天下りに導入される必要があるだろう。リンチが恐れているのはそんなふうにならぬに「合理性」をモデルの中に入れてしまうことなのか。それでわれわれは何か失うのだろうか。

4 まとめ

- ・リンチは既存の科学社会学、とりわけストロングプログラム以降のさまざまな立場にすどいつっこみを入れている。
- ・しかしそのつつこみは自分にもそっくりあてはまるように見える。
- ・「通常科学」へ向かう件については何を怖がっているのかよく分からない、という評価になってしまう。

付録 翻訳に疑問をもったところ

今回丁寧に読んだのは2章と3章だけなので気になった点もそこに集中していますが、1章、7章、結論でもいくつかたまたま気づいたところを指摘しています。また、2, 3章も日本語を見て気になったところしか原文をチェックしていませんので、全体を見比べながら読んだらまだいろいろ出てくると思います。

p.15 科学研究 Science studies (p.15 など) サイエンススタディーズという分野の存在を知らない人がどのくらいこの本を読むかよくわかりませんが、知らない人が読むと間違いなく誤解します。わたしは「科学論」と訳しています。

p.58 長期の論争のいくつかが解明されることを期待 訳文を見ると問題が解決するようなニュアンスに見えますが、解明にあたる原語は *illuminate* で、光をあてる、理解を促進する、くらいでは。

p.62 理念化された「科学的」利点 *idealized 'scientific' vantage point* 「理想化された「科学的」という有利な地歩」くらいでは。原文と見比べないと意味がよくわかりません。

p.62 言及することをもって言い逃れることをせずに 言い逃れると訳されたものの言葉は *being explained away* で、意味合いとしては、状況に言及することで無害化されてしまわないようにしながら、くらい。「言い逃れ」という訳にこだわるなら、「言い逃れられてしまわないようにしながら」と言い逃れる主体を逆にしないといけないと思います。

p.62 さらに *again* ですが、「ここにおいても」くらいだと思います。前の段落の最後で言ったことをここで詳しく説明しているところなのに「さらに」と訳すと話が変わったのかとおもって混乱します。

p.63 数学や「精密科学」の基準を用いることはありえない ありえないと訳されているのは *absurd*。英語を見ると「ああその「ありえねー」か」、と膝をうつわけですが、日本語だけ見ている人の大半には通じてないと思います。

p.63 [自然]科学的知識のシステム、社会科学的知識のシステム、日常的知識のシステムにおける3つの区別 *threefold distinction among* ~ なので「~システムという3つへの区別」。3つのシステムの中にさらに3つの区別があるように読めて混乱します。

p.65 知識社会学の妥当性要求から、数学や精密科学が属するとした厳格な認識論的基準を除外しようとしていた。「知識社会学の妥当性要求を、数学や精密科学が持つとされる厳格な認識論的基準から除外しようとしていた。」のはず

p.65 「内在的な法則 (*immanent laws*)」細かいが原文にはかっこがついてません。あとでこの引用文中のカッコが話題になっているので正確にしたほうがよいと思います。

p.67 2.社会的条件([括弧内略]) の特定化。社会的条件とは～ この訳書では、読みやすくする工夫と

して、複文を細かく砕いて訳すという方針がとられていますが、制限用法の関係節を単純に砕くと意味が変わってしまいます。ここも日本語だけ読むと「社会的条件」という概念一般の定義をあたえているようにも読めてしまいます。ついでに、**specification** を特定化と訳していますが、「特定」だけにした方が意味が通じやすいのでは（「条件の特定」はよくきくが「条件の特定化」だと何か特殊なことをしているように聞こえる）。

p.71 断定的には明言されていなかった **not definitely articulated** で、「はっきりと精緻化されてはいなかった」くらいでは。

p.73 まさに後継といえる **closely followed** ですが、わたしの語感では「跡継ぎ」という意味での **follow** には **closely** はつきません。**closely follow** は「忠実に従う」くらいでは。

p.75 利害関心という因果的な要因が通常の諸条件を背景にして際立たせられる **causal factor of interest is specified against a background of normal conditions**, で、「興味の対象となる因果的な要因が通常の諸条件という背景に照らして特定される」くらいでは。「利害関心という因果的な要因」は少なくとも誤訳だと思えます。

p.76 総合的アプローチ **overall approach** ここは「アプローチ全体と」くらいでは。日本語だけみると、マートンらが「総合的アプローチ」という特定のタイプのアプローチをとっているように見えます。

p.77 革新的 **radical** 単なる語感の問題かもしれないが。知識社会学のもたらした変化はラディカルではないかもしれないが少なくとも革新的だと思うのでこの訳語は違和感があります。

p.79 即物的基準 **impersonal criteria** 「即物的」という訳語からはだいぶちがうものを思い浮かべると思えます。「非人格的な」とか、それで分かりにくければ「個人を離れた」とか。

p.79 この規範には「発見者の名前をつける」という制度的慣習が含意されている **this norm is implicated by the institutional convention...** 含意の関係が逆で、「この規範は「発見者の名前をつける」という制度的慣習に暗に示唆されている」のはず。

p.83 ステファン・ターナー **Stephen** は英米では「スティーヴン」と発音すると思えます。他にもどこかでステファン・コールと訳してありましたがこれもスティーヴン・コール。

p.84 十分に研究を進展させることなど絶対にしなかった。 **were not doing very much** なので、「進展させる方向ではたいしたことはしていなかった。」くらいでは。

p.87 多様な研究成果を用いることによって詳しく述べられる 最後は **elaborated** で、ここでは詳しく述べるというよりは精緻化される、くらいでは。

p.87 メアリー・ヘッセ 実際「ヘッセ」と表記されているのはよく見かけますが、発音としては「ヘッシー」に近いはず。

p.87 相関的に特権化された科学信奉 **relationally privileged beliefs in sciences** で、このように訳せなくはないですが、そのあとに並列されているのが「大衆的でありながらも秘儀的な他のさまざまな信念システム」で、「科学における相関的に特権化された信念」と訳さないとうまく対比にならないように思えます。なお、こここの訳文で **pragmatic or 'social'** という英語に対応する部分が省略されているように見えますがわざと？

p.90 統合性 2回出て来ますが、どちらも **integrity** で、こういう文脈では「高潔さ」とか「誠実さ」とか「モラルの高さ」とかその方向の訳語になると思えます（正確に対応する日本語はないので難しいですが）。いずれにせよ統合性ではそのニュアンスが違ったわりません。

p.92 超越論の過剰性 **transcendentalist excess** 「行き過ぎた超越論」くらいでは。超越論というものが一般に過剰だというよりは、そちら方面にやりすぎてしまうこと、ぐらい。

p.93 論争を煽った社会的コミットメント 煽ったというとピアソンとユールを見ているやじうまが煽ったみたいですが、本人たちのコミットメントの話のはず。原語は **fueling** で、「論争の動機となった」くら

いの訳の方が分かりやすいと思います

p.94 議論の余地のないものである **nonnegotiable** 議論の余地がない、という客観的評価というよりは、「妥協のありえない点である」「譲歩不可能なものである」といった、本人たちのコミットメントについてのことでは。

p.94 割り引いて考えたり 訳文だけ見ていると「割り引いて考える」**discount** の主語が何かよくわかりません。原文だと研究プログラムが主語ですが、工夫して訳したためにかえって訳文はそこが主語と読めない。あらためて「その研究プログラムは」を補うとか。

p.94 何らかの流派における「科学に内的な」メンバーシップ **"intrascientific" membership in one or another faction** 何らかの流派への「科学に内的な」所属。これはまあ日本語からも想像がつくとはいえ。

p.95 歴史的続編となるものと同じように説明する **identical explanations of the historical sequellae to...** 「続編」だと何の話をしているかピンときませんが、ここでは **sequelle** を「後日譚」くらいにしておくと、結局「ある」ということになったのか「ない」ということになったのかの話なんだな、とピンとくると思います。あと、同じように説明する、だと特に問題はなくて、「同一の説明」を求めるのが行き過ぎということなのでは。

p.96 [社会的圧力でも既得権益でもなく、単純に]なにか不適切なことが起こっていたということが示唆されることもある。ここは英語ではなく純粋に読解の問題ですが、社会的圧力や既得権益で決定が行われるのは本来不適当ではないのに、哲学的分析を持ち込むことでそれが不適切とみなされてしまうというのを問題視しているのではないかと思います。つまり、訳者による補足はかえって読者をミスリードしているのではないのでしょうか。

p.97 そしてシステムは **this system** で「このシステムは」。こまかいですが短い引用なので何か引用箇所以外で定義されたシステム一般の話をしているのかなんなのかちょっととまどいます。

p.97 没評価的になっているかどうかはまったく分からない。 **it is not at all clear that they can do so.** 没評価的になることが可能なかどうかはまったく分からない。

p. 98 専門的に妥当な記述を行おうとすると、膨大な重荷を背負ってしまう 「記述を行おうとする」の部分は **claim to convey** で、「記述を行なっていると主張するなら」だと思います。主張するから重荷を背負うことになる、のではないのでしょうか

p.99 事例を表に出すことで思考習慣を手に入れ **exposure to current examples** で、現在の事例に触れることで～ ではないか。

p.100 個人の能力からはほど遠いほどの文献 「ほど遠い」にあたる原文の言葉は **outstrip** 「個人の能力をはるかに上回る量の文献」まあもちろんしばらく考えればそういう意味だということは分かりますが。

p.101 各々の論文とその内容上の対立 **the literature and its divisions** で、「文献群全体の様子とその中の区分」くらいだと思う。**literature** は集会的にあるテーマについて書かれた文献群を集会的に指すときによく使われますがよい訳語はないのでしょうか。

p.102 机上の相対主義ならば ここは関係節を分けて二文にしたところですが、そのため文意が伝わりにくくなっています。前の文に出てくる「机上の相対主義」が制限用法でこの一文で修飾されている（つまり～を用いるような机上の相対主義に携わずにすんだ、と言っている）というのは日本語だけ見てもよくわかりません。

p.103 決定テスト[追試] ここは原文は **crucial test** のみで「追試」は訳で補われたものだと思うが、実験の哲学の文脈で **crucial test** といえば、二つ以上の仮説が対立しているときにどっちが正しいか白黒つけようじゃないか、と行われるテストのことだと思います。それがある種の追試になることはたしかにあるが、一般論としては追試と同一視するのは間違いです。

p.104 ある実験がある所与の理論に合致している、あるいは反している、とみなされる時点は ここは **when** を時点と訳してありますが、単なる条件の **if** だと思います。「ある実験がどういう場合にある所与の理

論に合致している、あるいは反しているとなされるかは 痴愚の文に出てくる「時点」も同じく。

p.104 決定的相違 **dramatic discrepancies** 劇的な食い違い。対立しているのだから決定的に違っているのは当然ですが、ここではそれよりも立ち入ったことを言っていると思います。

p.104 精度の高い重力波検出器 ここは **delicate** を「繊細な」くらいに訳しておいた方がいいと思います。「精度の高い」と訳してしまうと、実際に重力波を検出できる装置だったように聞こえます。

p.105 こうした主張は「中核」メンバーには懐疑的に捉えられた。 **other members of the "core set"** で、「ほかの「中核」メンバー」とするべき。ウィーバー自身が中核メンバーだったかどうかというのはこの事例の解釈には重要なポイントだと思います。あと、**core set** を中核メンバーと訳してしまったために **core set** のメンバーという表現で無理をすることになってしまっているが、素直に「中核集団」としなかったのはなぜなのでしょう。

p.105 ピーク継続の周期性 継続と訳されている言葉のもと **succession** で「継起」。継起がわかりにくくていやなら「一連のピークの周期性」でも。

p.105 検討される現象 **phenomenon being detected** 「検出された現象」、ないしもうちょっと訳すなら「検出対象となっている現象」くらい？

p.107 決定的な反証は一つもなかったと言われた 誰に言われたのかよくわからない。 **as some would argue** で、「～と論じることでもできる」くらい。

p.108 つじつまの合わないウェーバーの主張 つじつまが合わないことが言っているなら冷酷に扱われるのはあたりまえに思える。原語は **discrepant** で、「異端のウェーバーの主張」くらい。

p.108 実験室研究 これは「科学研究」よりはましではあるものの、同じ理由で誤解されやすい言葉です。**science studies** を「科学論」と訳すのと合わせるのなら「実験室論」ですが、それだとアームチェアな感じ。結局ラボラトリースタディーズとカタカナのままにするくらいの方が正確なイメージを持ってもらいやすいかもしれません。

p.109 調査報告書 **research reports** 研究報告書。想定されているのはラボラトリースタディーズの対象となる **research** だと思いますが、調査報告書だとそのニュアンスがよく分からないと思います。

p. 110 「人工物」として科学的実在を記述するのに使われる語彙そのものによって この訳文だと、「構築」「製作」「人工物」として記述するのに他のどういう語彙を使うんだろう、と思ってしまいますが、当然「構築」「製作」「人工物」という語彙を使って記述することによって、という意味ですよね。

p.110 ～概念化することは構築主義の解釈とは対立する ここは **opposed to** で、「構築主義の解釈は概念化することに反対する」だと思われる。構築主義の側の能動性が訳文にあまり出ていません。

p.110 検体 ([カッコ内省略])に人工的に手が増えられること 検体にさらにどんなふうに加えるのだろう、と思ってしまいますが、原文は **artificiality of the specimen materials** で、「検体の人工性」つまり検体そのものがそれ以上手を増えなくても人工的だということを言っているのだと思います。

p.111 不可逆的に忘れられなければならない **not irreversibly forgotten** で、むしろ「不可逆的に忘れ去られてはならない」単純な見逃し？
その流れで、次の文の「関連づけられてしまうかもしれない」は「関連づけられなくなってしまうかもしれないから」。原文と逆の意図の文章になってしまっています。

p.111 これがどんな「事実」にも劣らず良い例になると思う この訳文だと何の良い例なのか良くわからないが、原文を見ると **as good an example as any of a "fact"**で、「事実」というものの何にも劣らないよい例]

p.113 左派的な変種 **left-handed variant** 「左利きの変種」もう少し訳すなら「左右あべこべの変種」など。もちろん **left-handed** を左派を揶揄する表現として使うことはありますが、このあと読み進めてもとりたてて「左派」っぽい話になっていません。

p.114 論理実証主義との主な相違の一つは **The major difference (and it was a major one)** 「主な相違は (そして確かに大きな違いだったが)、 」

p.114 システム内には含まれない **encompass** で「システムで包括できない」くらいでは。まあもちろん「含まれない」でも間違いではありませんが、「全体をカバーできない」というニュアンスが「含まれない」で伝わるかどうか。

p.114 世の中の先入観を純化した **purified of worldly preconceptions** 「先入観を純化した」だと、先入観そのものの純粋な形態の話をしているみたいですが、この **of** は **rob A of B** とかの **of** で、「世俗的な先入観を取り除いた」ですよね

p.119 含意はないのだ強調した **ここは単純な脱字** 「ないのだと」

p.124 この実験室研究を左派マートン主義と呼ぶ方が良い **this might better be called** だが、実験室の壁を超えていく研究のことを指しているので「この実験室研究を」だとちょっと妙。

p.127 脱ラディカル化されたラトウールのアプローチ この書き方だとラトウール自身が脱ラディカル化したみたいですが、むしろ、アメリカの社会学者がラトウールを脱ラディカル化したバージョンを使う、という意味だと思われる。

p.131 伝統化された歴史 **conventional history** 慣習的な歴史

p.137 科学主義と完全に決別するのも当然 「当然」の原語は **warranted**。正当化される、くらい？「当然」ほど強くない。

p.345 超越しようという試みに「はまる」 **"stuck"**だが、この訳文では **stuck** の意味の「はまる」だとは気づきにくいのではないのでしょうか。わたしはすくなくとも **obsessed** の意味に読んでしまいます。「超越しようとして「にっちもさっちもいなくなる」」など。

p.345 学術的 **erudite** ですが、学術みみたいな否定的なニュアンスはここではあまりないのではないのでしょうか。「学究的」くらい？

p.350 チョムスキーは「おかしなことは何も」言っていない カッコ内は **nothing fancy** で、「しゃれたことはなにもっていない」 **fancy** はかっこいい学術用語をちょっと揶揄するような感じで指すときによく使いますね。

p.352 認識トピックは標題を集めたものだが **the epistemics are collecting rubrics**, もちろんこの訳も可能ではありますが、「認識トピックはひとまとめにするための見出しである」と解釈の方が自然ではないでしょうか。

p.364 統一科学にとっての「時代遅れの」プログラム **"outmoded" program for a unified science** この **for** は「求める」の **for** では。「統一科学をもとめるという「時代遅れ」のプログラム」。

p.389, 注 19 そのような読解は明らかに見当はずれなのだが **this was certainly not the case for ~** 「これはまったくあてはまらないのだが」つまり、超心理学批判の側は自分たちの主張を根拠付けるものだとうけとらなかった、ということだと思います。